

DEATH ON THE NILE

ナイルに死す

アガサ・クリスティー

加島祥造訳



早川書房

ナイルに死す

アガサ・クリスティー
加島祥造訳



Hayakawa Novels

DEATH ON THE NILE

by Agatha Christie

Copyright © 1937

by Agatha Christie

Published 1977 in Japan by

Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan
by arrangement with

Hughes Massie Limited through

Charles E. Tuttle Co., Inc.,

Tokyo.

検 印
廃 止

ナイルに死す

昭和54年 1月20日 10版発行

著 者 A・クリスティー

訳 者 加 島 祥 造

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(254)1551(代)

振替 東京・6-47799

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 株式会社 明 光 社

定価 1600円

0097-901980-6942

ナ
イ
ル
に
死
す

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1977 Hayakawa Publishing, Inc.

私と同じように、

世界をさまよい歩くのが好きな
シビル・バーネットに捧ぐ。

著者の前書き

『ナイルに死す』は私がエジプトから帰ってすぐに書きあげたものです。いま読み返しても、自分が再びあの遊覧船に乗ってアスワンからワディ・ハルファまで旅をしているような気持になります。

船上にはたくさんさんの船客がおりましたが、いまではそうした船客たちよりも、この作品の中の人物たちの方がリアルな、身近な存在になってきていて、私は彼らと共に船旅をする思いです。

この作品には多くの人物を登場させ、筋も非常に念いりにつくりました。この作品の中心になるトリックは興味深いものだろうと私は考えています。それに、サイモン、リネット、ジャクリーンという三人の主要人物たちは、私には、生きた、リアルな存在に感じられます。

私の友達フランセズ・L・サリヴァンはこの作品が大好

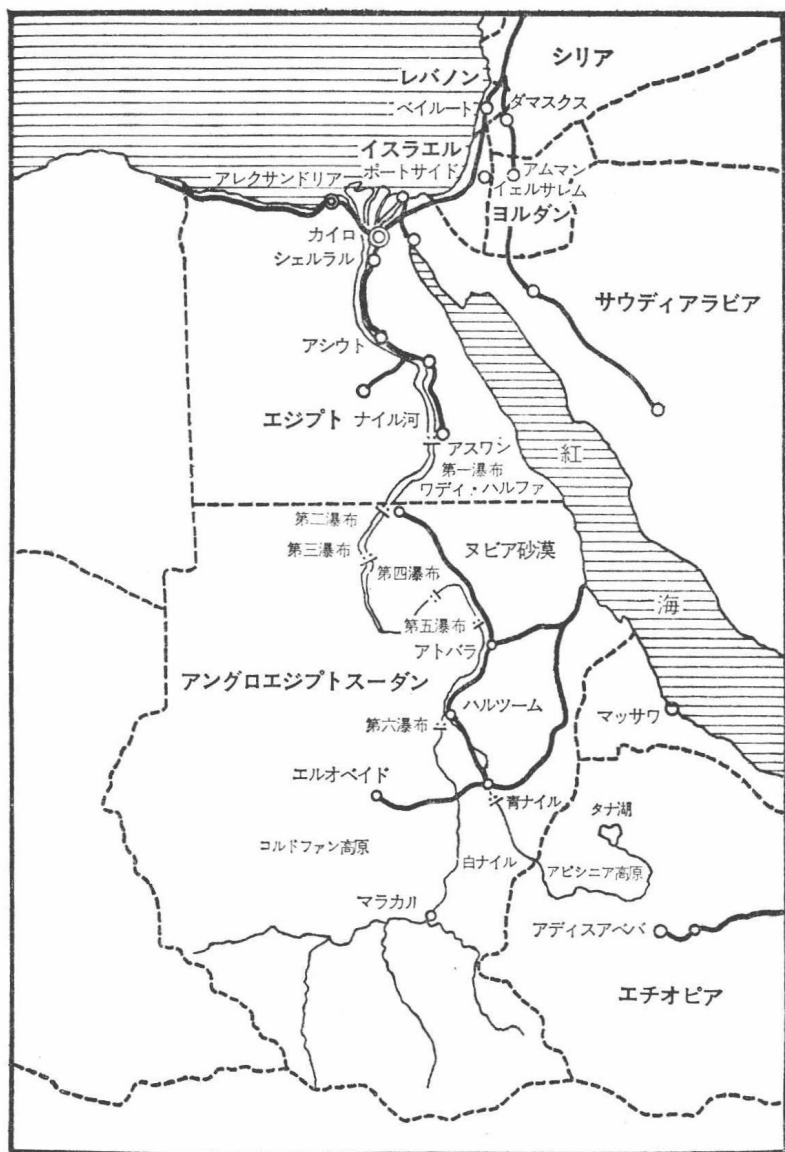
きで、私に何度もこれを劇化してはどうかとすすめましたので、しまいに私もこの作品を舞台化いたしました。

自分では、この作品は「外国旅行物」の中で最もいい作品の一つと考えています。そして探偵小説が「逃避的文学」だとするなら、（それであって悪い理由はないでしょう！）読者はこの作品で、ひとときを、犯罪の世界に逃れるばかりでなく、南国の陽差しとナイルの青い水の国に逃れてもいただけるわけです。

アガサ・クリステイ

〔訳者からのおねがい〕

はじめは少しゆっくり読んでください。登場人物表を参考にして、各人物の様子を頭に入れ、地図を参考にして、この舞台を想像してください。あとは――前書きの末尾でクリスティー女史の言う通りです。



登場人物

- リネット・リッジウエイ……………美貌で金持の若い女性
サイモン・ドイル……………リネットの夫
ジャクリン・ド・ベルフォール……………リネットのふるい友人
ジョウアナ・サウスウッド……………リネットの友人
ミセス・アラートン……………ジョウアナのいとこ
ティム・アラートン……………アラートンの息子
ミセス・オッタボーン……………女流作家
ロザリー・オッタボーン……………オッタボーンの娘
ヴァン・スカイラー……………金持の老婦人
コーネリア・ロブスン……………スカイラーのいとこ
パウアーズ……………スカイラーの看護婦
アンドリウ・ベントン……………リネットの財産管理人
スターンデイル・ロックフォード……………ベントンと共同の経営者
ジム・レクデイル・ファンソープ……………弁護士
ウイリアム・カーマイケル……………ジムの伯父

シニョール・ギド・リケティ……………考古学者

カルル・ベスナー……………医者

ファীগスン……………左翼的言辞を弄する青年

ルイーズ・ブールジェ……………リネットの女中

フリートウツド……………カルナク号の機関士

レイス大佐……………英国特務機関員

エルキュール・ボアロ……………私立探偵

第一部

「ありゃありネット・リッジウエイだね！」

「うん、彼女だ！」

酒場三冠亭の主人バーナビーは、そばにいる友達に相槌を打った。

二人はいかにも田舎者らしく目玉を剝いて、少し口をあけたまま、問題の女性を見凝めた。いま土地の郵便局の前に、車体を真赤に塗った豪華なロールス・ロイスが停ったところで、そのなかから一人の若い女がはねおりたのである。彼女は帽子をかぶらず、着ている服もごくさっぱりした簡単なものである（いや、簡単なものにみえるだけだ）。髪は輝くような金髪、身体つきも素晴らし。すらりとびて、あたりを圧するような感じである。ひと口に言えば、このモルトン・アンダー・ウッドのような田舎町では滅多にみかけない女性である。

さっそうとした足どりで、彼女は郵便局の中へ入っていった。

「ああ、まさに、彼女だね！」バーナビーはもう一度こう呟くと、さらに、感に堪えないと言った小

声で言葉が続けた。「何百万ポンドって財産なんだぜ。あの家だけでも何万ポンドと注ぎ込んでるらしい。プールもこさえるんだとき。庭はイタリー式だって。家の半分はぶちこわして建てなおすそうだ。舞踏室もできるんだとき」

「この町にもかなりの金を落してくれるだろうな？」相手の男が口を入れた。やせた貧弱な男で、彼の言葉つきには多分に羨望の気持と恨みがましい気持が混っていた。

バーナビーはうなずいてみせて、「そうだとも。モルトン・アンダー・ウッドのような田舎町にとっちゃたいしたことさ。いや、たいしたことだて」

彼は一人で悦にいていた。

「これで俺たちみんな、目がさめらあね」

「ジョージ卿のころとはちょっと違ってくるなあ」

「ああ。あの人が落目になったのも馬のせいだ。競馬ですっちゃったんだ。一度もめがでなかったんだからな」

「あのお屋敷、売っていくらになったんだい？」

「手取りで六万ポンドだって話だ」

やせた男は口笛を吹いて目を丸くした。

バーナビーは得意げに鼻をうごめかして話を続けた。「おまけに彼女、家の改造にもう六万は使うだろうって話だよ」

「馬鹿みたいだな！どこからそんな金がでるんだろう？」

「人の噂じゃ、アメリカだってさ。彼女の母親ってのが、百万長者の一人娘なんだと。ちょっとした映画物語じゃないか、ええ？」